

研究・調査報告書

報告書番号	担当
535	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Racial/ethnic differences in prevalence and correlates of binge drinking among older adults. 高齢者における過剰飲酒の有病数と相関の人種・民族間差異	
執筆者	
Bryant AN, Kim G.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Aging Ment Health. 2012;16(2):208-17.	
キーワード	
高齢者、過剰飲酒、人種、民族差	
要 旨	
目的： この研究では、高齢者における過剰飲酒の存在率と相関が人種民族間でいかに変化するかを調査した。	
方法： 2007年のCalifornia Health Interview Surveyから抽出し、60歳以上の18,772名を選んだ。過剰飲酒は、昨年一日に5杯以上（女性は4杯以上）飲酒したと報告したかどうかに基づいて二分法で調べた。昨年の過剰飲酒の存在率を、人種民族ごとに計算し、昨年の過剰飲酒を従属変数として使用し層別化ロジスティック回帰分析を行った。	
結果： 存在率の人種民族間の有意差が明らかになった。すなわち過剰飲酒は、非ヒスパニックの白人において最も一般的で(11.9%)、ラテン系アメリカ人(10.8%)、アメリカンインディアン・アラスカ原住民(9.8%)、黒人(8.0%)、アジア人(4.2%)がそれに続いた。現在喫煙者が過剰飲酒の最も強い予測因子であることが判明した。また、黒人、アジア人、若者、男性、失業者、貧困閾値の高さ、健康意識の高さ、精神的ストレスの多さなどが、有意な主要効果であることも明らかとなった。人種民族と年齢・性別・雇用状態・教育水準・喫煙状況・健康意識との相互作用が有意であると判明した。これらの発見は、過剰飲酒の確かな相関が、高齢者において人種民族間で有意に変化するということを示唆している。	
結論： 高齢者における過剰飲酒の存在率と相関には、明らかな人種民族間差が存在する。より多くの人種民族間の特異的な予測因子を明らかにすることは、それぞれの人種民族にふさわしい介入プログラムを開発するために重要である。	